

美濃の石楠花

高橋玄洋

放送日 昭和38年5月2日
番組名 おかあさん（中外製薬）
制作 中部日本放送
演出 伊藤 隆
音楽 成田 真次

登場人物
俊美 阪口美奈子
野路 渡辺富美子
修平 今泉 洋
礼治 柳 有
政二 大塚 竜司
生母 伊藤 友乃
トシミ 舟橋真由美
店員 岡本 昭一
旅館の女中 高田 典子
加藤 昌弘

1 旅館の一室

溪流の音が聞こえている。

女中が襖を開けて、

女中 あの、お風呂のご用意出来ました……どうぞ。

政二 ありがとうございます。

政二、俊美を振り返る。

政二 どう？……じゃ、俺、先に入るか、……（タオル取り）どうしたんだい、いつもの俊美ちゃんみたいじゃないぞ。

俊美 御免なさい。

政二 いいさ。

俊美 ……ここも溪流が流れてるのね。

政二 うん（と、障子を開けてみて）大分下らしいな。……疲れたんだろう、楽にしてるといいよ。全く結婚式なんて二度とやるもんじゃないな、どんな顔してたらいんだかさっぱり判りやしない。

と、去る。

俊美、部屋を見廻す。

明り障子、スタンド代りの岐阜提灯、民芸風な電灯傘等——総て美濃和紙である。

2 タイトル

“美濃の石楠花”

美濃和紙の様々からその製造過程へ——そこには総て水があり繰返しがある。

3 俊美の家

紙抄かききをしている手元。

その格子越しの庭に自転車の俊美、帰って来る。

——夕闇せまる頃。

俊美 バイバイッ。

俊美、自転車を置いて土間へ。

俊美 只今！

囲炉裏の傍で仕事をしている兄修平。

修平 何処へ寄ってたんだ？

俊美 映画。……兄ちゃんアラン・ドロンで知ってる。

修平 知るもんか！

俊美 （紙抄場を覗き）母ちゃん、只今！

声 お帰り。

父、礼治、張板を持って入って来る。

俊美 只今！

礼治 ……。

修平 今送って来たん、政二か。

俊美 ン。……送って貰わんでもいいって言ったんだけど……。

修平 いいよなあ、政二は……。

俊美 なんで？

修平 勤められるからさ、次男坊は……。

礼治、又出てゆく。

俊美 サラリー安いのよ。

修平 当り前さ、八時間働きゃいいんだ。……母さん切り上げんか。

野路の声 ああ、先に上りな。……もう少しだから。

俊美 母ちゃん、そんなにつめることないわよ。もう七時よ。

野路、抄きだちの紙を持って出て来る。

野路 御飯は？

俊美 食べて来ちゃった。……政ちゃんたらおかしいのよ。うどん屋さんでね、私キツネでいいって言ったのよ。そしたら昼のお弁当も油揚げだったね、だって……。お部屋が違うのに、どうしてお弁当の中まで判ったのって、さんざんとつちめてやったの。そしたらね。

修平 “俺も毎日油揚げを食わされるのか” って、言ったんだろ。……俊美、油揚げで口がまわり過ぎるンじゃねえのか。

俊美、睨んで見せる。

野路 ちりとりりの済んでないのあったねえ。

修平 ちりとり位い、こ奴にやらせなよ。

俊美 私、手伝ったげる。

と、野路のザルを奪う。

父、張板を持って入って来る。

野路 一本つけたら、熱いの。

修平 ああ。

俊美と野路、出てゆく。

修平、大きな徳利に酒をつぐ。

父は黙って蒲団をしいてひっくりかえり、喘息ぜんそくらしい咳をする。
修平、囲炉裏の火をかき、火箸を投げつけるように灰にさす。

4 ちりとり場

俊美、来て裸電球を点ける。

一尺余りの溝に綺麗な水が流れている。

俊美 あっ、まだ火種が残ってる。

と、穴を開けたバケツに枯枝を折ってくべ、真っ黒くなった薬缶を置く。

野路、別のザルをかかえて来て、

野路 俊美ちゃん、兄ちゃんの前で政二さんのことあんまり言うンじゃないよ。

俊美 あら、どうして？

野路 どうしてってことないけど……。

俊美 二人、二枚重ねのセンベイ蒲団に並んで坐り、ザルを水につけてちりとりを始める。
母ちゃんただだね、手放して喜こんで呉れるの。

野路 そうかい。

俊美 そうよ。別に気にしてせんけど。……でも同じ出して呉れるンなら気持ちよく出してくれたっていいと思うわ。まあ、父ちゃんはあんな人だから何考えてるのか判んないのは仕様がないうとして、兄ちゃんは若いンだもン、あれで青年会なんかじゃ結構新しいものよ……。家じゃ結局、娘を労働力としか考えてないからよ。

野路 そうでもないさ。

二人、黙々と仕事をする。

俊美 折角、映画みていい気分帰って来たって、いつもこれなんだから……。 (涙をすする)

野路、俊美をちらと見て、

野路 母ちゃんだって、手放して喜こんどりやせんよ。

俊美 エッ？ じゃあ……。

野路 仕様がないうと思うとる。

俊美 (ツンと) そう。

又、黙ってしまう。

野路 俊美ちゃん、あんな、紙抄きの家へ嫁入りしようなんて考えたことある？……ないでしょう。

俊美 紙抄きの娘だからって紙抄きの処へ嫁がなきゃならないってことない筈だわ。

野路 そりゃそうよ。でも朝の四時五時からこうやって晩の七時八時まで、つけ通しに手を水へつけてなきゃならない仕事、他所から来た人に我慢出来るかしらね。

俊美 政二さんがお勤めに出てるのがいけないって言うの？

野路 そんなこと言ってやしないよ。

俊美 だから子供の頃から宣言してた筈よ、紙抄きのお嫁さんにはならないって……。第一、美濃の紙が少々強くて綺麗だからって、大製紙会社がジャンジャン出来て安い紙がジャンジャン出来る世の中に、こんなことやって追いついていけないわけがないんだわ。そのシワ寄せがみんな働く人間に来てるのよ。

野路 そういう仕事を兄ちゃんはやってかなきゃならんのだよ。お嫁にだって誰も来たがらない仕事を……。

俊美 (ハツとする)

俊美、やけに多くごみを選び出す。

野路 兄ちゃんだって俊美が倅せになつてくれりゃ、何も言うことはないのさ。……だけど兄ちゃんだって人間だからね、男だからね、男らしい仕事もしたんだろうし、綺麗なお嫁さんだって貰いたいさ。あんなは今有頂天だから無理もないんだけど、見てる母ちゃんだって腹が立つことがあるよ。……そりゃあね、俊美は高等学校へも行ったんだし、算盤も習ったんだから月給取りさんのお嫁さんになったって一寸もおかしかない。母ちゃんだって兄ちゃんだって、そのつもりであんなを学校へ上げたんだからね。その母ちゃんが腹の立つて来ることもあるんだよ。まして兄ちゃんは政二さんの二級上なんだもの……判つてたつて……。

俊美 判つたわ、もう……。

又、黙々とごみを取る。

その手元を流れる清流。

俊美 倅せになるってむずかしいのね。

野路 うん。

俊美 でも、私が紙抄きの家へ行って一生紙抄き婆で終ったって、兄ちゃんがそれだけ楽になるわけじゃないわ。

野路 そりやそうさ。……母ちゃんだって、あんたは街の団地住いをするような奥さんにしてやりたいし、兄ちゃんには、あんた以上のお嫁さんに来て欲しい……変な話だけどね。

俊美 一寸も変じゃない、当り前よ。

野路 来て呉れる人が居たら、母ちゃんウンと可愛がってやるンだけどなあ。

俊美、黒い葉缶を取り出し、小さなバケツへお湯を入れる。

野路 ありがとう。

と、バケツへ手を入れて暖を取る。

俊美 母ちゃん、どうして父ちゃんの処へなんか来たの？

野路 どうしてって？

俊美 だって紙抄きが好きだったわけじゃないでしょ。それに父ちゃんは……。

野路 父さんは口数の少ない人だからね。

俊美 少ないどころか、感情なンてあるのか判りやしない。

野路 現わし方を知らンのだよ。

俊美 どうだか知らンけど、私が母ちゃんならとても耐えられないわ。

野路 それほどでもないさ……。

俊美 それに、子供が二人もいてさ。

野路 あんた達がいたから来たのさ。

と、又仕事にかかる。

俊美 可哀想だったから？

野路 フン、……それに母ちゃんもその頃は可哀想だったからな。

俊美 フーン。

と、湯に手をひたす。

俊美 母ちゃんが来た日のこと、今でもよく覚えてるわ。

野路 フーン。

俊美 本家の小父さんに、兄ちゃんと山へ行って枯枝ひろって来いって言われたの。……

……帰って来たら、母ちゃん、来てた。奥の釜で御飯炊いてた。

野路 そうだったかねえ。

俊美 そうよ。……そいで私達の顔みたらオイデオイデしといて、逃げて川辺りで泣いてたわ。……子供心にも母さん、みてびっくりしたンだと思った。

野路 そりや違うよ。

俊美 兄ちゃんと可哀想だねって、裏の石楠花の枝折って持って行ったわ。

野路 そりや覚えてる。

俊美 前の母ちゃんよりやさしそうだと思っただわ。

野路 前の母ちゃんなことがあるかね。お腹痛めて呉れたお母ちゃんじゃないか。

俊美 実感でそう思っただけよ。

野路 子供なんて勝手だねえ。

俊美 あの頃、母ちゃん可哀想だったって、どう言うこと？

野路 そうだねえ、もう俊美も大人だからね、……母ちゃん、ここへ来る前に、一遍結婚してたんだよ。

俊美 知ってる。

野路 処が旦那さまに嫌われちゃってね。

俊美 見合い？ 恋愛？

野路 決ってるじゃないか、この顔、恋愛なんて顔かい？……子供も出来ただけどね、お婆さんに連れて帰られちゃってね。どんなにお願いしても返して呉れないし、会わせても呉れない。静子ちゃんて、二つん時だったんだけどね、……悪い処があったらどんなことしても改めるからって、泣いて頼んだんだけどねえ。

俊美 ひどいわねえ。

野路 結局お仲人呼んで離縁になっちゃった……丁度そんな時、あんた達のお母ちゃんが亡くなられたって新聞読んだのよ。

俊美 新聞みて申込んだの？

野路 申込んだだなんて、人聞きの悪い……そんなにつらい仕事なら、少しは気がまぎれるんじゃないかと思ったのさ。

俊美 (わざと) なんだ、私達が可哀想だからじゃなかったの。

野路 最初はね。

俊美 で、忘れられた？ 気がまぎれた？

野路 そこが馬鹿だったんだね、いくらつらい仕事だって、朝から晩まで同じことの繰返したろ、手足動かしてりゃいいんだもの、頭の方は何んだって考えられるんだよ。……でも、あんた達がいてくれたからね。

俊美 世話をやかされた方がよかったのね、もっと世話をやかすんだった。

野路 あれ以上かい。

俊美 そんなだった？ お尻でもブツてやればよかったのに……。

野路 兄ちゃんは腕白一方だったから、まだよかつたけどね。あんたは、変り目ついでうと決って腹あこわして青鼻垂らしてるし、蚊や蚤のみには負けるし、その跡が又直ぐオデキになって仲々乾きやせんしな……。

俊美 あきれた。

野路 ようここまで育ったもンさ。

俊美 本当ね。

俊美 しんみりして仕事をする。

俊美 母ちゃん、今でもその静子ちゃんて子に会いたい？

野路、答えず仕事をする。

——間——

野路 (ぼつんと) 生んでくれたお母ちゃんのこと忘れちゃいけないよ。

俊美 ……でもまだちっちゃかつたからね、よう覚えてないわ。

野路 お母ちゃんの最後みとどけたんは、俊美ちゃんだけなんだろ。

俊美 うん。

5 昔のちりとり場（雪）

現在のようになきちんとした家になっているのではなく、川原の一部を石で仕切った流れの前に茅の屋根がふいてあるだけ——その下で母が機械的にちりとりをしていく。そばに立って泣いているチャンチャンコ姿の俊美（五才）。母、取ったちり指先ではじいたり、手品のまねをしたり、水の中へおっこちそうにして見せたりして気嫌を取るが、俊美は泣きやまない。それでも母は両手に息を吹きかけては仕事を続ける。

俊美はソップをむいて惰性で泣いている。

母、睡魔におそわれる。

何度か目を大きく見開いてちりをとるが——まるでアメーバーでもずり落ちるよう
に流れの中へ消える。

俊美、音に振り返って空の布団をポカンと見る。

トシミ かあちゃん、手品？……かあちゃん、手品？……かあちゃん、手品？

雪はシンシンと降り続いている。

O・L

6 ちりとり場

——間——

野路 昔は二時頃から起きてやってたって言うからね。

俊美 （突然ヒステリックに）どんなに夜中から起きてやったって、大企業にはかない
つこないのよ。工場に行ったらこんなに大きい（と手を一杯に広げ）ロールに飛ぶ様に
巻込まれるほど生産されてるのよ。しかも一分の狂いもない紙が……こんな、美濃の手
抄きなんてものがあるから皆んな苦労しなきゃならないのよ。こんなものがあるからッ、
こんなものがッ！

と、水面に叩きつける。

野路 （拾って）機械抄きで出来ないから、こうやって手抄きでやってるんじゃないか。

俊美 そうよ、手抄きの様な長い繊維が機械で抄けるわけないわ。手抄きは、こうぞやが
んびで、機械はパルプが原料よ。当然丈夫で綺麗だわ。誰だって“いいわ”って言うわ。

……味があると言うわ。それが一体何なのよ。一寸位綺麗だからって、味がある
って……ただ眺めるだけじゃないの。誰もこの手の冷たさなんか判っちゃ呉れないのよ。

野路 別に判って貰うために抄いてんじゃないさ。

俊美 （構わず）いい物をつくれればつくる程、吾々と全く縁のない料理屋さんかなんか
に使われるだけなのよ。

野路 タイプライターの原紙だって、手抄きじゃないと出来ないじゃないか。

俊美 どうしても必要なものなら、それだけの値段がつけられる筈だわ。美濃の和紙は
しよせんは、なぐさみものなのよ、亡んでゆくものなのよ。……昔からやって来たから
って、そんなものに嚙りついてる方がおかしいのよ。

野路 そうかねえ。……さ、少しよこしなさい。（と、俊美のザルのものを取り）……
母ちゃんだってね、初めはこんな辛気臭い仕事好きじゃなかったよ。でもね、母ちゃん

が抄いた紙を、何処かの誰かが綺麗だなあって見てくれる。お盆に岐阜提灯つけて、冷たそうだなあと思ってくれりゃあ、母ちゃんそれでいいと思うよ。……そのために夜なべまでしてるわけじゃないけどね。

俊美 じゃ、何ンのためにこんなにつめてんの？ 生活のためでしょ、私が言いたいの
はそこなのよ。

野路 食べてく位い、どうにかなるさ。

俊美 じゃ、何のため、私への面当て？

野路、初めて俊美を睨みつけると、傍にある俊美の手首を握りしめる。

野路 もう一度言っごらん！

俊美、おそれて身を引くが、野路、睨んだまま放さない。

と、へなへなと放してしまう。

俊美 (顔に両手を当て) だって、だって……母ちゃんたちの仕事……あまりにも報われないんだもの。(と泣く)

野路 (弱々しく) 大きなお世話だよ。……俊美は、政二さんに、お母さんたちの手伝いはしないって条件を出したんだってね。

俊美 ……。

野路 ……母ちゃん、こんなに悲しいことはなかった。

俊美 その代り共稼ぎしてお小遣い上げるわ。

野路 (泣きそうになりながら) ……俊美は……十五年も、母ちゃんの何を見て来て呉れたんだらうねえ。

と、涙をすすり上げると、かたくなにちりとりを続ける。

——間——

俊美 (耐えて) 母ちゃん……ごめんなさい。

野路 私にじゃない。……亡くなったお母ちゃんにあやまんなさい。

俊美 嫌や嫌やッ……母ちゃんに……母ちゃんに……。

俊美、野路の前かがみの肩に顔をすりつけて泣く。

7 家の中

寝返りを打つ父礼治、最後の徳利を片付ける修平、漬物をつまんで立ち上ると仕上げの仕事を始める。

8 ちりとり場

同じ形の親子。

野路 さあさあ、いつまで泣いとる……母ちゃん重うて仕様がないな。……ほれッ、いい年して、お嫁に行こうって娘が……母ちゃんなぞ、あんたの年には、それこそ箸が転んでもおかしかつたもんだがねえ。

俊美、やつと離れ、顔にびしゃびしゃ水をかける。

野路 ほしい。(と、手拭を差し出してやる) ハハ、折角の顔が台無しだ。

俊美 (照れ隠しに) 母ちゃんにもそんなに笑った頃があったンね。

野路 そりゃあつたさ、これでも美人だって言っ呉れた人もいるンだから……。

俊美 わあーッ、誰？ ボーイフレンド？

野路 ……あの父ちゃんじゃ仕様がなないけどね。

俊美 父ちゃんが？!

野路 それもたつたの一遍……とつてつけたみたいにさ。

礼治の咳込むのが聞こえている。

野路 そらそら、悪口言うから咳込んどつてじゃ。

と、立ち上る。

野路 火をよう見といてよ。

俊美 ウン。(と消しにかかる)

野路 先刻、俊美ちゃんは、手の冷たいのなんか、誰にも判って貰えないって言つてたけど、お嫁さんの仕事なんて、大方そんなもんだよ。

俊美 (言わせないように) もう判つた、判つた。

と、ザルを受けとる。

野路 ううん、俊美ちゃんのことじゃあないのよ。……母ちゃん、以前の家離縁になる前、苦勞が一寸も判って貰えないで随分不満に思つたり、責められりやア、旦那さんに毒づいたりもしたけど……今から考えりや母ちゃんも間違つてたんだよ。

9 庭

——言いながら庭へ出て来ている。

俊美 その諦めで家へ来たから、家みたいな処でももつたのね。

野路 そうかも知れねえ。

俊美 せいぜい政ちゃんには……。(言いかけて口を押える)

野路 いいさ、政ちゃんにはいくら聞かせたって。母ちゃん筋金が入ってるから。

俊美 言つたわネ。

野路 御覧、いい月だ。

俊美 本当。

野路、一寸見て家の中へ入ってゆく。

10 同家中

野路、土間へ入つて来る。

野路 あれ、父ちゃん、もう寝んさつたン。

修平 他愛ないよ、全ク。……悩むこともないンだな。

野路 あれだけ、喘息で悩んでりや沢山だよ。

俊美、入つて来る。

修平 なんだ、その顔は？……そんな顔は政二にや見せられねえな。

野路と俊美、顔を見合わせる。

外でオート三輪の止る音。

修平 ほらッ、婿どんが来たぞ!

俊美、あわてて紙抄場へ逃げ込む。

修平の声 ハハハ、現金なもんだ。……おいッ、化粧道具持つてつてやろうか。破談ちう

奴にでもなるとこつちが大損害だからな。

野路の声 ハハ修平、あんまりいじめるンじゃないよ。

俊美、フネの中を棒でこねながら格子の外を気にしている。

男二人、鏡台を抱えてやって来て通り過ぎる。

俊美の顔、みるみるゆがむ。

店員 遅くなりました。

野路 まあ、ご苦労さま。

店員 如何です。こう置いてみるといいものは仲々いいでしょうが……じゃあ。

修平 うむ、お茶一杯飲んでいかなかね。

店員 いえ、後がまだありますから……どうも有難うございました。

修平 どうも。

店員、帰ってゆく。

紙抄場との入口から、俊美、顔を出す。

野路 どう？ この方がいいだろ？ あんたが言ってたのじゃ一寸貧ひんそうだったからね。

修平 どうだい、俺の見立てもまんざらじゃないだろう。お前らの言う……何だ、センスとか何とかって奴さ。

俊美、じつと鏡台を見る。

俊美 私……知ってるわ、これ。……一万円よ……一万円だったわ。

修平 今時、四千円位の鏡台が通用すると思ってるのが、どだいセンスがセンスなんだよ。……第一、鏡の質が違うんだ、鏡の質が……。

俊美 判ってるわよ、それ位い……。

野路 まあ、坐ってご覧よ。

俊美、上って鏡台の前へ坐り、おおいを上げる。

その中の俊美の顔。

野路 俊美ちゃん、美濃の手抄きは見ただけのものだって言うけど……鏡だって見るだけのものだよ。

修平 これで、あの洋服箆筥が届けば、まあ何とか恰好だけはつくよな。

野路 ……。

俊美の顔がクシヤクシヤになってゆく。

俊美、兄や母の方へ正座し、両の手をつく。

俊美 母ちゃんッ！

顔が上らない。

野路 ……兄ちゃんや、母ちゃんが夜なべしたくなるのも判ってくるだろう？

俊美 兄ちゃんッ！

肩が震えている。

修平 バッカだなあ。……照れちゃうじゃないか。

野路 兄ちゃんにはお礼言わなきゃねえ。

修平 バッカヤローッ！ 俺ン処にはもつといい鏡台もった嫁さんが来らあ……。

修平、怒ったように草履を突っかけて庭へ出てゆく。

遠く戸口の向うに修平の突っ立つ姿が見える。

野路 よかったねえ、俊美……。

礼治が咳込む。

野路、その方を一寸見て紙抄場へ去る。

俊美、何処にも下げようのない頭を鏡台に向って下げる。

野路の手抄きの音が快く聞こえてくる。

11 旅館の一室

鏡の中の俊美、もう一度、スタンドや障子を見廻す。

襖が開いて湯上りの政二、入って来る。

政二 お先に……いいお湯だよ。

俊美 ウン。

政二 どうしたんだい。着替えりやいいのに……。

と、近寄って来る。

俊美 政ちゃん、大変なお嫁さん貰ったのよ。……そう思わなけりやバチが当たるわよ。

政二 何だい急に……。

俊美 母ちゃんがそう思わせなさいって。

政二 ハハハ、とんでもないことを教えてくれたんだな。

俊美 ……お前は、二人のお母ちゃんを食いつめてここまで育ったんだから、それ位の値打ちがあるんだって。

政二 食くいつめてはよかったナ。

俊美 思う？ 思わない？ どっち？

政二 思うよ、思うよ。

俊美 その代り、あの条件は撤回するわ、紙抄きは手伝わないってあれ。……二人の母ちゃんの分ひつくるめて、お母さんのお仕事手伝うわ、……勿論、お勤めから帰ってからよ。

政二 どう言う心境の変化なんだい。

俊美 フフフ、だってこの腕が泣くもン。

と、立って明り障子を開ける。

そこに石楠花の花が咲いている。

SE——せせらぎの音。

(終)